

多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム  
派遣研究報告書

2010年 11月 25日

派遣者氏名（専門分野）	リンダ・ガルワネ	（ 比較文学専門 ）
-------------	----------	------------

下記のとおり報告します。

記

研究テーマ	ロシア文学における日本人表象の構築に見るインターテクスチュアリティ
-------	-----------------------------------

派遣期間

22 年 9 月 21 日 ～ 22 年 10 月 6 日

	国	都市	訪問機関	受入研究者
訪問研究機関	ロシア連邦	モスクワ	ロシア国立図書館	リュドミーラ・ジューコヴァ（人文 大学准教授）
		サンクトペテルブルグ	ロシア公立図書館	カリネ・マランジャン（ロシア科学 アカデミー教授）
		サンクトペテルブルグ	サンクトペテルブルグ国立大学 東洋学部	カリネ・マランジャン（ロシア科学 アカデミー教授）

派遣先で実施した研究内容

今派遣の目的は、ジャポニズムがロシアに 20 世紀初頭に入ってから今日にいたるまでの、ロシアの雑誌・新聞に描かれた日本人の表象、日本をテーマとする作品、さらに、ロシアで出版された、日本人が描かれた外国文学作品（日本文学を含む）に対する新聞・雑誌の調査を行うことであった。そのため、ロシア滞在中は、モスクワやサンクトペテルブルグ、それぞれの訪問機関において、次のような資料の調査を行った。

1. 9月22日から27日まで、そして10月4日にかけて、モスクワのロシア国立図書館で主に調査したのは、20世紀前半のジャポニズムが表現された外国文学の翻訳物、そしてソ連時代のテキストであった。ジャポニズム最盛期の資料にまでさかのぼって調べたが、本研究においては「インターテクスチュアリティ」がキーワードとなっているので、ロシアのテキストだけでなく、外国文学の翻訳物も閲覧した。特にジャポニズム時代においては、ロシア文学作品が少数であったので、外国文献の翻訳物を調査することが多かった。

日本出発以前には、モスクワの外国文献図書館において外国文学の調査を行う予定であったが、研究にとって最も重要である20世紀のほとんどの外国文学作品の翻訳物はロシア国立図書館に収蔵されていることが分かったので、モスクワ滞在中は、ロシア国立図書館で集中的に作業することにした。

なお、ロシア国立図書館の新聞・雑誌は本館ではなく、モスクワ郊外の別館で収蔵されているため、閲覧に不便であることから、その種の資料は主にサンクトペテルブルグのロシア公立図書館で閲覧した。

2. 9月28日から10月3日まで、サンクトペテルブルグのロシア公立図書館の本館で調査を行った。同館は、20世紀前半の資料を中心に、さらに、貴重資料（20世紀前半の本、新聞・雑誌）を収め、新館はソ連時代や現代の資料を扱っている。それ以外には、新聞・雑誌の別館があり、資料の種類に応じて、これらの三館すべてを訪問し、調査した。

研究において最も重要なのは貴重資料室の資料であった。特に有意義な調査を行えた資料は1904年、1905年の雑誌であった。現代作家のオルガ・ラズレワは『ロシア人の芸者』という小説の中で1904年にペテルブルグで出版された『破片』という絵入り雑誌に連載された芸者のカリカチュアに言及している。この小説に言及されたカリカチュアは実在するものであるのか確かめるのが最初の目的であったが、その風刺画を確認するために閲覧した雑誌『破片』は史料的に非常に興味深いことが分かり、詳しく調査することとなった。1904年、1905年に出された号には、日露戦争という時局の影響で、様々なカリカチュアだけでなく、日本人をおとしめる笑い話、詩、短編が多く連載されていたが、これらは当時の日本人表象の形成に大きな影響を与えたと思われるので、サンクトペテルブルグのロシア公立図書館の貴重資料室では最も長い時間をかけて精細な調査作業を行った。貴重な資料のため、コピーすることができなかったが、重要なカリカチュアと文章をスキャンすることができたので、これから『破片』の資料を博士論文だけでなく、学会発表にもグラフィック・プレゼンテーションを含む発表の可能性を検討したい。

3. 派遣中、モスクワでは、これまで連絡をとってきている作家、上述のオルガ・ラズレワと対談する予定であったが、作家の都合によりこれはキャンセルされた。このため、モスクワでは図書館での作業にさらに多くの時間をさき、1904年10月・11月の日本がテーマとなっている象徴派の雑誌の特集を調査し、どのような資料が連載されたか、それは日本人表象の形成にどのような影響を与えたのか研究した。なお、サンクトペテルブルグでは、カリネ・マランジャン（ロシア科学アカデミー教授）とのアポイントメントがあり、研究の進め方について相談した。

## 研究の当初の目的・計画の達成状況、明らかにできた成果

今派遣の目的は、ジャポニズムがロシアに20世紀初頭に入ってから今日にいたるまでの、ロシアの雑誌・新聞に描かれた日本人の表象、日本をテーマとする作品、さらに、ロシアで出版された、日本人が描かれた外国文学作品（日本文学を含む）の新聞・雑誌の書評の調査によって、ロシア文学における日本人の表象が時代の変化によってどのようにテキスト化されていたのかを明らかにするということであった。

ロシア国立図書館で調査を行ったジャポニズム時代のテキストの中でも特に多かったのは、予想通り、外国文学作品のロシア語訳のものであった。外国文学の作品の翻訳の仕方によって、大きな違いが出てくる可能性があるため、原作か、それとも他の翻訳物を通してロシア語版が出版されたのか、逐一、調べる必要があった。調査した外国文学の翻訳物の中では特に重要なのは、1904年に出版されたハンガリーの作家のメルシオール・レンギールの『台風』という戯曲である。この戯曲が原作から翻訳されているのか、重訳されているのか、それによって作品の解釈、そして影響関係が変わると思われる。ロシア国立図書館では、原作の言語が示されていない翻訳物と原作からロシア語に翻訳されたものを含め、四つのロシア語版すべてを見ることができたが、様々な理由のため、当時は重訳ではなく、原作からの翻訳であったと思われる。その中に、ラゾーヒン石版出版局のバージョンも閲覧することができた。しかし、興味深いのは、『台風』の四つのロシア語版はどれも1910年に出版されていたということである。そのような事実は当時、この戯曲が非常に人気であったことを証明するが、なぜ翻訳のバージョンは四つも必要であったのか、また、四つのロシア語版の相違点はどのようなものであるのか、どのような役割を果たしているのかは、さらに検討する必要がある。

また、『ゲイシャ』というイギリスの戯曲をもとになった、1901年に出版されたロシア版の『ゲイシャ』という戯曲を発見し、これは派遣者の研究にとって今後、重要な資料になると思われる。日本の芸者をテーマとした、「オデッサのゲイシャ」（1902）、「ロストフのゲイシャ」（1903）などという資料を発掘することができたが、そのような「雑誌」は実はかなり戯れ歌調のものであることが分かった。芸者＝軽い女というイメージに基づいた歌集が再三再四出版されたことが分かり、外国とロシアのテキストを利用することで、ロシアにおける日本人の女性の表象に重要な影響を与えたと考えられる。そして、その歌集から見られる「芸者」と「歌」のイメージが緊密に結びつかったことを考えると、『ゲイシャ』というイギリス戯曲はこれまで派遣者が思ったより強い影響を与えたことが明らかになった。

派遣者は2010年度に予備論文では、日露戦争時代に捕虜として在日した作家のフォードル・レインガルトの作品（自伝小説）を取り上げ、考察したが、今派遣中には、もう一人の同時代の捕虜、フィリップ・クプチンス

キーの日本語にも翻訳されている『おいくさん』(1911)の原作の調査もできた。これらの作家の作品はインターテクスチュアルなものではなく、実体験に基づいて著書である。しかし、派遣者の博士論文では、インターテクスチュアルな、つまり他のテキスト上に創作された日本人の表象と直接な関係の上で形成された日本人表象の比較する際には、クプチンスキーの作品も重要な役割を果たす。

なお、ソ連時代においては、『オキヌさんの物語』(1985)というヴァレンチン・ピークリの作品は作家の日本での実体験ではなく、テキスト的に得られた知識に基づき創作されたものであるため、作家が利用した資料を特定し、探したのが、大きな目的であった。ロシア公立図書館において、作家の妻がコレクションしているピークリの資料を説明したブックレットを見つけ、これを利用して、ピークリがどのような資料によって、日本人の表象を形成したのか、研究した。『オキヌさんの物語』のモデルとなった日本人の「ムスメ」の写真、そして、ピークリの妻の、作家が『戦艦』と『オキヌさんの物語』、つまり日本をテーマとした小説を書いた時期についての発言が連載されている資料は特に派遣者の研究において重要な意味を持つ。なお、1962年から1990年(死亡)までピークリは現在ラトビアのリーガに住み、そこで作家の死後、資料館が設けられたことが分かった。現在その資料館は閉館されているが、ラトビアでピークリに関する資料を調査できる可能性があるため、今度はラトビアでも調査を行いたい。

また、ソ連時代初期に活躍したボリス・ピルニャクという作家の、日本をテーマとした、日本では入手できなかった作品、そしてそれに関連する資料の調査を行うことができた。しかし、これ以外にとくに新発見はなかった。彼がソ連時代に抑制されていたため、この作家に直接関係のある資料が少ないせいではないかと思われる。

このように、助成受領者は海外派遣の機会を与えられることによって、様々な資料によって、現代まで至るロシア文学における日本人表象の構成のインターテクスチュアリティのあり様の調査を行い、それが多くの新資料の発見、新たな知見へとつながった。

### 派遣後の研究発表の予定

2010年11月13日—14日 PAMLA(Pacific and Ancient Modern Languages Association) 108<sup>th</sup> Annual Conference, セッションEast-West Literary Relations, Chaminade University (発表言語は英語)